

七 思立つたを吉日に

荻生徂徠は一代の名儒である。「梅が香や隣は荻生宗右衛門」と其角がうたつた彼の塾も、墮落の極に達した當時では、至つて黜いかはりに、やれ歌舞よ音曲よと、寄席や芝居には人波打つて流れ込む。従つて弟子とても一向勉強はせぬ。すると或る弟子が一つ先生を皮肉つた。「先生、歌舞音曲の寄席や芝居には、澤山人が集りますが、此の塾には、何故人が來ないのでせう。」「ナニ、そりや腐つたものには、蠅が集るものぢや」と、徂徠傲然厲語。弟子は辟易して仕舞つたとある。何もひるむことはない。人は人、吾は吾、思立つたを吉日に、勇ましく求道の旅路に立てよかし。

林羅山の學友で菅得庵と云ふ人が、或年の大節季に羅山に向つて「自分はまだ『通鑑綱目』を讀んだことがないが、君は讀まれたか」と問うた。羅山が「疾くに讀んだ」と答へたので、得庵は「それでは明春から講義を聞かせてくれないか」と頼んだ處「君が果して聽きたいのならば、何も明春からでなくとも今から始めやうではないか」と、大晦日から直に講義を始めたさうである。何によらず思立つたが吉日。苟にも道を求めんとする已上は、何は措いても即刻着手すべきである。佛法には明日と云ふことはない、何でも取急いで法は求めなくてはならぬ。

人生の無常世相の轉變に驚き起ちて、求道の旅に進まんとする人、唯だ熱誠なれ、忠實なれ、大勇猛心を發揮するところあれ。低く我心の實情を眺めて、高く如來の心情に接せよ。そこに必ず信仰の情熱は沸き來るであらう。「たとひ大千世界に、みたらん火をもすぎゆきて、佛のみなをきく人は、ながく不退にかなふなり」。

燃ゆる火を分けても法はきくべきに、雨風雪は物のかづかは

或寺の和尚さんが、他所から柳のおろし枝を貰つて来て、之を挿木にしやうと、小僧に云ひつけて垣の邊にさゝせ、さうして言ひ含めて置いた。「子供などが来て抜くかも知れないから、よく守つてゐるがよい」。小僧は其日から竹縁に机を出して手習をしつゝ、柳を見張つて居た。すると七日ばかりたつて、和尚は庭に下りて、柳を見まはりながら、「この柳は子供が抜くだらうと思つて居たのに、少しも抜いてないのは、お前がよく番をしてゐたからだ」と褒め、「それにしても、夜のうちに子供がはいつて来て、引き抜いたら咎めやうもなかつたらうに、よくも夜こなかつたものだのう」。「左様でございませう。夜の間に抜き取られたら、守つてゐた甲斐もないと思ひましたから、何時も初夜が過ぎると引抜いて箱に納めて、夜が明けると直ぐ挿すやうにしてゐました」。小僧澄まし込んで云ふものだから、和尚も呆れ返つて「道理で柳が芽を吹かぬ筈ぢや」と大笑ひに笑つたとや。

時々思ひ出す位の事や、思出して太儀ながらお参りする位では、仲々實功はあがりかねる。もう一つ本氣になり眞劍になつた處に、信仰の芽は吹いて来る。茲に某誌の一節を紹介する。或老媪病に罹りし時、行先が心配になつて来て、其兄に之を打明けた。兄が申すには『御和讃』には三千世界の火を過ぎ行きても法を聞けとある。數町隔つた處に法の御師匠がある。起つて歩めなかつたならば、四つ這になつて往つて聞いて来いと叱りつけた。老媪は兄の言ふ儘に這うて行つて聽聞し、厚信な同行となられた。

信の得られぬのは大事が掛らぬからである。大事のかゝらぬのは、自分の危いのが知れぬからである。讃岐の庄松に或人が「私は今から地獄の繪を拜んで来る」と申したれば「あゝ参つて御出で、善く見て来なさい。私には其は要らぬ事だがお前には要る。地獄はお前の行く處ぢや、篤と氣をつけ

て見てお出でみ い「と云はれたさうである。是を思ふ時これ おも ととき、此が爲の御本願と聞これ ため ごほんぐわん きく時とき、唯名號一たぐみやういつつ御本願一ごほんぐわんつ御助け一おたすつの外ほかはない。